

おおふく まゆみ
大福 真由美

電機連合・書記長

明日に架ける橋

「明日に架ける橋」といえば、60年代から70年（代）にかけて、若者を中心に絶大な支持を得た“サイモンとガーファンクル”の歌としてつとに有名である。リリースされた当時（70年 - 昭和45年）は、まさにベトナム戦争末期の時期であった。そうした時代背景もあり、その詩に込められた内容（「僕は君の身代わりとなり、荒海に架ける橋のようになろう - I'll take your part... Like a bridge over troubled water」）は、若者の参戦や戦死が日常となる社会状況の中で、その犠牲が明日への架け橋になるという切ない思いを代弁し、多くの人々のやりきれなさを免罪してくれるものとして共感され、受け入れられたのである。ベトナム戦争はそれからほどない75年（昭和50年）、多くの尊い命を犠牲にして終結し、ようやく「明日に架ける橋」は架かったかに見えたのである。だが、それはこの30年の歴史経過に明らかのように、つかの間に過ぎず、それが証拠に、現在もイラクの地に砲火鳴り止まない状況が続いている。しかも日本も非戦闘地域（？）とはいえ、戦後初めてイラクという外国の地に自衛隊の大規模派遣を行い、その一年延期にまで踏み込んでしまっている。まことに「明日に架ける橋」とは、多くの命を礎にしなければ架からないものなのだろうか。

さて、そうした世界平和という大きな命題とは別に、私達は新たな年に向け、身近な課題でどんな「明日に架ける橋」づくりに汗を流さなければならぬか考えてみた。とはいえ、明日への思いは人それぞれに違いがあり多岐にもわ

たるだろう。ここは独断と偏見をお許しいただき、2点に絞り提起させていただく。

まずはニート問題である。フリーターがようやく一般的に使われるようになったと思ったら、今度は「ニート」という新たなワードが出てきて、正直戸惑い気味なのは筆者だけだろうか。「Not in Education, Employment, or Training」の頭文字をとって「ニート」と造語した英国生まれのワードである。日本語訳では「若者無業者」と呼ぶのが適しているようだ。要は、働かず、働くつもりもなく、だから就労のための職業訓練もしないといった、ないないづくしの若者を指している。この「ニート」が労働経済白書（04年度版）で52万人もいると公表されたのだから驚かすにはいられない。戦後の荒廃から立ち上がり、今日の豊かな社会を築いてきた人々たちから見れば、到底理解しがたい存在であり、行動様式であろう。だが、「勝手にさせておけ」という親や世間の言い分も、「どうするも自分の勝手」という当事者の言い分も脇にのけて、これは「社会的問題としてメスをあてるべき」とする認識と対応が必要だと思う。というのは、これを放置すれば経済や社会保障制度に多大な影響が及び、持続可能な社会の条件を根底から覆しかねないからである。いまさら豊かさの代償と嘆いても始まらない。できることからという意味では、連合もいろいろな方策を提起しているが、まず行政の先導でこうした層の就労参加への具体的プログラムを早期に起動させることが急務だろう。また、中期的には、教育のあり方として、社会の中における自



分の果すべき役割や責任を自覚できるカリキュラム、あるいは社会的なモラルやエチケットといったより精神性を高めるカリキュラムなどの充実・見直しが必要だ。最近の凄惨な事件（親殺し、子殺し、他人殺し、あるいは殺人の若年化、残虐な殺し方など等）の発生など聞くに堪えない。おそらく長い間の金権・物欲を放置した人間教育の欠如のなせる結果なのかもしれない。新渡戸稲造が「義は人の道なり」を始めとする「武士道」を著し、日本の普遍的な倫理道徳観を世界に紹介し感銘を与えたのは実に100年以上も前なのである。このバックボーンを今一度鮮明にし、そうした精神性のもと若者が将来に夢と目標を持ち、社会をリードする気概がもてるインセンティブある仕組みづくり（＝「明日に架ける橋」づくり）に汗を流さねばならない時なのである。

今ひとつは、人口減少問題である。これは少子高齢化問題とも言い換えられるが、既に日本の人口は減少に入った（厚労省04年5月推計）ともいわれ、07年問題（団塊の世代の社会からの退場<退職>が始まる - 労働人口も減り始める）とも相俟って、対策を急がねばならない深刻な問題となっている。というのも、このことで経済サイズは縮小に向かい、成長率が鈍化し、生活水準や年金・医療・介護といった社会保障制度も大きな影響を受けることになるからだ。しかし、史上最低を更新する出生率(1.29)は、そう簡単に復元できるものではない。外国人労働者の導入は現実の問題となってくるだろう。また、高齢者はかつての余命と違い、退職

以降20年間に對し新たな生き方を模索しなければならない。年金の支給時期の後退や自己負担の拡大などの問題が出てくるに違いない。とまれ、世論もこのことにようやく危機意識を共有し始めたところだ。経済サイズの縮小の中での最適化も視野に入れながら、女性や高齢者の就労参加を促し、成長率を鈍化させぬよう知恵を絞ると共に、やりがいや働きがい、あるいは自己実現に結びつくこれまたインセンティブなくみ（＝「明日の架ける橋」）づくりに汗を流さなければならない、それこそ今が剣が峰の時なのである。

戦後日本は経済至上主義のもと効率ばかりを追い求め、物質的にはまことに豊かな国に成り遂げた。だが見失ってきたものも少なくない。人がいて社会や組織ができる必然性があるとするれば、今日までの軌跡はあまりにも人への尊厳や公德心、あるいは人情といったものを犠牲にしすぎてきたのではないだろうか。掲げた2つの問題への挑戦も、まずはそこを見直すことが必要であり、またそのことが解決の核心ともなるはずだ。そうした意味で、私たちがまず取り組むべき「明日に架ける橋」とは、実は「人の心と心」に架ける橋からであるべきだ。そうしなければ、物中心で来た戦後との決別もできないからである。改めて組合も社会的役割を自任し、これらへの挑戦に汗を流す大覚悟を表明し、新年に際しての決意の一端としたい。